

第一回美 日本畫合評

(四)

石井天風 橋本正素 尾竹竹坡
中野玉翠 長荷雅山 中島敬春
山内春城 山脇荷雅 阿倍春
島田多門 飛田周山 (以上八幅)

下村觀山筆 『木間の秋』 (つぎ)

●日本畫の或る一方面に特色を現はしたのに敬服する。殊に一方を森の入口、一方を森の奥として、一雙の屏風を無意味で無く別々に現はしたのを感じさせるのは意匠がある。殊に奥が好い。金が見えたのは尊と氣に見えるが堅いものとなつた。欲を言へば繊細過ぎる。も少し大膽な、も少し捌けた遣り方が欲しい。刈萱の青い、熊笹、柏の葉の色など少しく附會では無いが、夫から木の上の葉など小細工に流れたやうで、大體に感謝すべき畫だと感じて居る。

○私は此作を會場第一に置き書と考へる。多くの畫は凡て畫其者よりも其人の癖とか何とかいふものがさきに出て現はれてゐるやうに思ふが、此畫は先づ畫といふものよりは、下村といふ癖が少し認められぬ。夫丈貴いと思ひます。大體緻密に流れたのは缺點かも知れませぬが、兎に角是丈に仕上げられたのは敬服の外無い。之に付て或る畫家は筆勢が無いと言つた。井中の蛙世間を知らぬと感ずる。

▲力量が有つて多少古いものに據られた所も有るかも知れぬが、光琳、宗達より複雑に能く活かしてある。彩色は美しいしんみりとした秋の感じが有る。場中第一だと思ふ。

◎兎に角此畫は、吾々初めは好いと思はなかつた。餘り着實過ぎて、當世流行りの屹とした所が無いから、又吾々のやうにぞんざいな所が無いからさう思つたが、二度三度と觀るに従つて敬服した。遣り方もですが、配色が是丈色々に使つて以外に能くも調和して思ふ。場中配色に於ては此畫が一番調ふてゐる。惜しむらくは、餘り取られた場所が複雑した樹木が多い爲に、色の度合が多少取れなかつた所が有りはしなかつたか。前の木が薄い爲に奥に見えたりしてゐる。然し是丈の畫を出されたのは後進者の參考で結構である。

△雄大ですらうとして、君子に接するやうな氣がする。敬服の外無い。
▼木間の秋としては遺憾があらう。秋の説明は足りない。日本では悲觀的だが、外國では樂觀的である。然し僕等には寂しい枯れたものよりか、生き／＼した寂しいものゝやうに感じてゐるので、此畫は光線が主か、木が主か、木間の秋が主か、

これだか認めることが出来ぬ。派手で綺麗で、畫題に深く引張られる氣が仕ない。木の葉だ木だといふ丈で、地から生えたと思はれぬ。生きてゐる氣が無い。友仙のやうな氣がする。
□非難の有るものは標的の程度と描いた人との間に程度があるからだらう。高い所に置いて見れば、稍や成功に近いもので、憎い程調つたもので、細部分の技巧を云々するのは段階があり、低くから見れば缺點が有り、上から進んだ所から見るとは無からう。栖鳳先生と好い對照で、兩大關と思ふ。

●此風の遣方は宗達が遣らんとする所だつたらうかと見る度に感ずる。光琳は遣らず終つた。下村君に至つて、宗達の目的と考へる所以上に行つた場中第一の佳作と見る。缺點をいへば木間の光が此光では十分に木の上に来ないと感じることである。

山内多門筆 『驟雨』山村秋色
◎眞面目であるが、感興によつたものでない。上は小細工が無いが好い。其爲切り取つた感じがする。
▽感興に驅られて描いた畫で、凡てはざんぐり思ふ存分に行ふた。一氣呵成の爲凡ての用意が無視されてはしないか。夫が爲調和を缺いて、凡てに水氣が薄くなつた。夫が缺點である。



『木間の秋』 (第一回美術展覽會審査員) 下村觀山筆

▲作者は是迄考へられた所が、或る物以外に技巧の樂を持ち、軟かいもの、硬いもの、圓いもの、四角なものに考へず、纏つて人に感じを與へぬ。技術は確に惜しい。
◎三重味有つて好い畫だが、古畫を觀る氣がして、形式が多く入つてやしないか。『驟雨』に於て殊に形式が吳道子の瀧の感じがする。場所も似てゐる、形式が第一さうだ。
●『驟雨』は下圖の時には趣味があつたが、大きく

なつて感じが抜けたやうである。
▼いつも乍ら手に入つた山水が自由に出てゐる。畫題は面白い所が見える。前景は面白いが、遠景はどうも前景程に軽くなく、苦しさうに見える。遠景は前景より劣つたものと思ふ。
●安心は見えぬ。先は或物を見て描いたもので筆もす／＼と行つて居らず、描き方は感服せぬ。構圖もさうで、實地に臨まれずして家の中で出来たものと思ふ。
倉大作的方(山村秋色)の上の餘白を、『驟雨』に持

つて來度い。技としては能く調つて感服したが、親友として苦言を呈する。成人の批評に、技は出來て、好く行くは當然だが、餘りにぞん／＼拍子に技術以外に世の中が買つてゐるやしないか。是以上に出んでは無いかといふことであつた。是は考へて貰ひ度い考へた。岡倉氏も言はれやうに、當人も飽いたといふ遣り方で今少しく新らしく開拓し度いといふことである。
○八方的で、青年としてかういふ所をやるのがい

△感興によつて描いたものだらうか。どういふ方法にしようとはせず、古人の名畫から現はす材料を探したもので無らうかと想像する。此作者は研究を積んでゐるが、現はす場合には、古人がかういふ所を現はしたに就て、どういふ所を現はしたかといふ所を考へたら、是以上に自分の筆で非難はしなかつたかと、非常に遺憾に思ふ。夫で非難が出ることを思ふ。

島内松南筆 『落葉』
●兎に角是は、美人薄命といふ意味を落葉で現はしたか。あたりの景色、美人として落魄したといふのみで、美人の感想には何等の感興も起らぬ。圖の構へが巧みで、あたりが小薩張りとしたのが印象せしむるのみでは無からうか。英人の作などにもかういふ圖があるが、かういふのは過酷なる印象を與へる。今一息力の籠つた畫にしたら面白と思ふ。

○惠遜藝評 不空道人
豊明りかゝる殿に玉のごとよりあふ妹らの誰が手を執らむ。
眞玉つくをちの小管のか細なる妹が手とらむ否とはいふとも。
た長なる眞袖は天に散る花と紅れる妹らが舞ひさびのよさ。
舞ひ終へは吾もゑひたり座上に近かる君は禮言まをせ。
もどりを總のたくみが東詞ふるきは知らず妹なそそりぞ。
椽なす筆の太筆手力に揮ひて繪けますら男匠。祝ぎ人の中の稚妹をくれなるの薄染衣と吾れわすれかね。
白壁のおとつ新ひ室ごよむらし廣業の朝臣が年のほぎ日と。
焚きくゆる伽羅にはあらず無花果の不折がこがす柚味増七釜。
座上にのらふ法師は鼻をなみ利目はさげごも弱聲にして。
君が繪の處女の眞肌血みたねばいろざる土の像しろにして。
女神らが諸手にもたる美し玉息吹の霧と初風に散る。
新らしき光はみてりいざや兒ら嚴しき大道かこみ行かな。